

しまんと 四万十川の人びとを齋り育てる人

山本衛詩集『讃河』に寄せて

1

旅をした時に、私は早朝に起きて近くの川まで散歩し、川原に下りて野草を見に行く。どんな野草が咲いているのか、また水の流れはどんな具合かとか、懐かしい人に会うように向かうのだ。川を見ると、不思議だがそこに暮らす人びとが、長い年月をこの川と共にどう生きてきたのか、感ずることが出来るのだ。山からつづく自然な川とどう関わり、どう守ってきたか。またどう人工化してきたか。どんな観光書を読むよりも、確かに雄弁に語りかけてくれるのだ。

山本衛第五詩集『讃河』の契解説文を書こうと思った時に、二〇〇〇年に行った高知・中村で見た四万十川を思い浮かべた。その時は詩誌「ONL」の山本衛さんから呼ばれた浜田知章さんの講演に同行したこともあり、そこで出会った詩人たちとの話が優先されて、川原に下りる余裕もなく、自動車から遠くの欄干のない沈下橋を眺めて、中村を去っていったのだ。しかしいつかゆくりと「暴れ川」と言われる四国の大河・四万十川を見られる日が来るのではないかと心ひそかに願っていた。

「河」であります、また「さんが」は惨劇の惨であり「惨河」とも言えるのです」との思いをもちました。私はこの一九六キロにおよぶ四万十川を山本衛さんは、愛憎半ばする複雑な思いを持って暮らしていると直観したのだった。讃えるだけの河でなく、そこで暮らした人びとの人生の惨劇を見ているからそういう言葉が出てきたのだと感じたのだ。

自動車はこの川の右折に合わせて中村方面の五六号から分かれて旧幡多郡を貫く三八一号線に入って行った。蛇行する山道は狭いが、すれ違うドライバーはダンブであっても必ずあうんの呼吸で徐行し合い、笑顔さえ見えるような親近感を感じた。山本衛さんに聞くとそれがこの四万十では普通だという。私が東京や関東近郊で運転中に経験する殺気を感じるようなドライバーたちとは全く違うと感じた。それから山本衛さんが校長先生をしていた四万十町の川のほとりの小学校へと向かっていったのだ。川岸の野原には草やススキが群生し、石垣の庭には彼岸花が立ち枯れ、鶏頭、コスモス、カンナが群れ咲いていた。昭和小学校は四万十川を見おろす位置に建っていた。山本衛さんは若いころに赴任し、多くの小学校に移りながら、再びこの小学校の校長として勤務したという。感慨深げに山本衛さんは校門に立った。飾り気のない小さな小学校だが、この町にとけ込んでいる静かな佇まいだった。中学校も隣接していた。百メートルもゆうにとれる校庭が広がっていた。学校前には畳屋さんがあった。山本衛さん

二〇〇七年秋に、私は早朝の飛行機で高知空港に降り立った。山本衛さんが迎えに来てくれた。私が四万十川を見たいので、無理にお願いをして川を案内してもらったことになったのだ。山本衛さんは中村から三時間近くをかけて自動車で行ってきた。小雨まじりだったので普段着の防水用パーカーを着て出迎えてくれた。懐かしい人と再会して、国道五六号線に乗り、懐かしい川に向かったのだ。

高知市内の鏡川や仁淀川を渡り、須崎を過ぎて、七子峠にさしかかり休憩をとった。その場所から久礼湾の海が見えた。鉄道や自動車がない頃、この七子峠は中村から高知に向かう最大の難所であったと山本衛さんは語り始めた。ここにそびえる権現山が隆起したので、四万十川は久礼湾に流れ落ちることをしないで、山の手前で右に曲げられて西土佐の山峡に向かつて流れていったと語る。山本衛さんにいつごろの話ですかと聞くと、笑いながら数十年前か数十年前から分らないかと少し前に見てきたような口調で物語っていた。三一九もの支流が流れ込み、複数の源流の中でも最大の源流である不入山いりやまから流れてくる四万十川は、確かにこの山から右に折れて、複雑に行きつ戻りつ蛇行するが右へ右へと曲がり高知県の山間やまあいの上流へと流れ込んでいくのだ。山本衛さんは言う。〈鈴木さん、四万十川を案内する時に上流に向かつて流れる川と言うと誰もが驚き、実際にお見せするとまた信じられないと言うのです〉。そして〈鈴木さん、連詩「讃河」は「讃え

が声を掛けると、夫婦で藁を束ねていた教え子が親しげに走り寄ってきた。主人である教え子は再会を喜び、仲間たちの消息も語った。六十歳前後で亡くなった複数の教え子たちの名を告げられると、山本衛さんの顔はくもっていったが、気を取り直して、元気に働いている教え子を讃えて、また車を走らせていった。河口までまだ半分も来ていなかったが、この中流域から下流へと複雑に蛇行していくのだ。

川は昔のように誰もが入って鰻や鮎をとることはできないという。漁業組合の許可が必要で、子供たちも勝手に泳ぐこともできなくなったらしい。学校にプールを作るのを校長であった山本衛さんは、反対をしたらしい。脇には四万十川が流れているのでその川に親しませたらいいと考えていたからだ。子供たちを溺れさせたくないという親心が、四万十川から子供たちを遠ざけていったと山本衛さんは言外に語っていた。

私は山本衛さんを車において、所々の川原に降りていって、川原の野草を眺め、敷き詰められた白や蒼い川石を拾い、川面の四万十ブルーの色頃を楽しみながら、下流では青海苔が採れるという清流を掬って口に含んだ。鳶が上空を舞い、百舌だるうか、対岸の斜面の樹木の中から鳴き声が響いてきた。また山本衛さんはダムのない最後の清流といわれている四万十川の違う顔を見せてくれた。家地川取水堰堤という名が付いていた。川の半分の水はそこに流れ込むようになって

っている。そして堰堤という名のダムがあり発電がされている。半分の水は四万十川に戻らずに海へ流されてしまう。四万十川の水裏が減ったのはこれらの堰堤の影響であり、何回も廃止の運動が起こるが、そのたびに漁業補償によって立ち消えになってしまふという。それから四万十川は砂利採取によって大きな影響を受けているという。岩盤がむき出しになり光景が一変し、鮎の餌である石に付く藻も減り、鮎の砂利への産卵も妨げられて鮎もめっきり減ったという。不入山などの上流以外の森は、トチやブナなどの落葉樹林から戦後になって杉や檜へと植林されたので水源林としての役割を減らしているのだろう。山本さんはさらに言う。〈ダムから落ちていった魚たちは、バラバラになってしまふんです。それらの川魚は痛ましい〉と。

2

山本衛さんは今まで四冊の詩集を出している。その詩集を紹介しながら、山本さんにとっての詩と故郷の関係を考えてみたいと思う。

山本衛さんの第一詩集『石臼』（公立学校共済組合本部）は一九六六年に刊行された。二八篇の詩が収録されている。序文を詩人阪本越郎が書いている。「吉野川の激流が白くさかまおほぼけ大歩危、小歩危の嶮を経て、汽車が喘ぎながら土佐に入るところからみると土佐はけわしい山国であると思う」と記し

石臼

回らなくなって 久しい

石臼は
冷たく 重たい

七十七で婆が死んで

もう何年めなのだろうか
うすは それ以来

縁の下に転がっている

哭くように

祈るように うたいながら

婆は 白を挽いた
擦り切れた木綿じじま紵の袖の下に

小さな 美しい花粉が散り敷く と やがて
ニイやネエの空き腹を充たし

おとうとの乳になつた
—— 急いじやいかあ

しずかに しずかに
まるく 休まず 落とさにならぬ

冬が逝くと

ている。そして高松から土讃線で徳島の大河・吉野川の源流を越えて、阪本越郎は高知県に入り、高知市で山本衛さんと会い、阪本越郎は次のように出会いを書き留めている。

〈昭和三十八年六月、私はこの土地に遊び、まざまざとその強固な意志を、桂浜に立つ坂本龍馬の像にみた。その夜、台風風の吹きまくる中で、この詩集の作者山本衛君にはじめて面会した。君はこの前年の詩作がみとめられて『文芸広場』年度賞を獲得したのであった。（略）この土地の農民の子として育ち、そしていま農民の子を教える立場にある君は、遅しい詩魂をもちづづけた。あの時代の暴風雨に抵抗する精神、これこそ土佐が産んだ純粹なレジスタンスであろう。この精神に支えられて、これらの「詩」が書かれたことは、銘記されなければならぬ。／遠い海鳴りのように廻りつづける「石臼」につながる、この土地の貧しい人々、しかし決断的な強靱な精神、郷愁の哀しさに打ちひしがれない雄々しい土性骨、「かいつり」や「うばめがし」の実のことを歌うこの詩人が、あの**大歩危**、**小歩危**の激流の彼方にいることを、私はこの詩集の読者に伝えたい。〉

阪本越郎は四十年前も前に山本衛さんが「土佐が産んだ純粹なレジスタンス」を継承し、さらに高知の中でも険しい山河に暮らしている「遅しい詩魂」を抱えた若き詩人であると高く評価していたのだった。

馴染みの爺がやってくる
磨り切れた臼の目立てに

互いに貧しいしかなかった爺の訪れは
すりへらされた貧しさを確かめにか
すりへっていくものを奪い去りにか？

一晩中
石を刻みつづける音
川の向こうのかなしい物語が
婆たちをなかせた

小さく碎け 細かく殖えて 家を支えた
のろく
遠い海鳴りのように回りつづけた
嬰兒の間引きにさえも使われた という
血のいろも 今は 失せて

石臼は埃りに埋ずみ
姪たちの乳は店から購かうが
うちは
いつも貧しい

I章は四万十川や海の詩だが、II章の十一篇は父母、祖父

母たちの暮らしを見詰めた詩篇だ。詩集のタイトルにもした「石臼」は、山本衛さんにとって連綿と続く命の原点になるものだったのだ。婆の挽く石臼によって、穀物、木の実、麦など多くのものが、貴重な食糧となって兄、姉など自分たちの命を支えたのだという。婆と石臼への感謝を決して忘れないという思いがこの詩をタイトルとさせたのだろう。「哭くように／祈るように うたいながら／婆は 白を挽いた」という三行に込めた思いは、決して忘れることのない痛みの光景であったのだろう。山本衛さんの肉体の奥深くに刻まれた根源的なリズムとなつて甦ってくるのだろう。「馴染みの爺がやってくる／磨り切れた臼の目立てに／互いに貧しいしかなかつた爺の訪れは／すりへらされた貧しさを確かめにか」という詩行も、戦前の農村の有り様を照らし出している。石臼は上臼と下臼のすきま（ふくみ）に穀物などを落として挽くことによつて粉となる。擦り合わされる面には刻みが幾筋も付けられる。しかし一冬使えば磨り減つてしまう。春になると石臼の減つた刻みを修理する爺がやつて来る。山本衛さんはその婆と爺の会話を傍らで聞いていたのだろう。その会話の中からかつて先祖たちによつて「嬰兒の間引きにさえも使われた」ということも聞かされたのだ。石臼のすきまがすべてのことを呑み込み、碎き、粉にしていつたことを書き記したのだ。

その石臼は、今は埃が被り使用されることはないが、しか

年毎に 新しく

日を追うて盛大になつていく

死者への饗宴

だが 酷熱の

世界は 余りに

のろい テンポの唱和でしかない ひとびとの読経

ゼニゴケやアオミドロの群生

の下に眠る

死者よりもなおむりすぎる人々

湿った墓地をつき破り

真紅のカンナが

ギラギラ 高く

眩しい

—— 幸徳秋水の墓前で ——

阪本越郎が山本衛さんを「土佐が産んだ純粋なレジスタンス」を継承している詩人だと評価したのは、二章にあるこの詩のような汲み上げてくる詩的な抵抗精神だつたと思われる。幸徳秋水は同郷の中村出身で本名を傳次郎と言ひ、神童

し山本衛さんは捨てることが出来なかつた。一九六六年の第一詩集のタイトルにその詩「石臼」を付けたということで、家族に代表される民衆の暮らしの貧しさを引き受けて詩作をしようとして決意したに違いない。山本衛さんにとって詩とは、婆や爺の哀しみの風景でありながら、人の暮らしの場所から手触りのものを通して、人びとが再生されていく言葉の連なりなのだろう。

夏の村

芭蕉の 葉裏に 焼きついた

蟬の声 と

にふい読経が

焦立たしく 調和する

静止する苦痛

の中によみがえる あの

巨大な 重圧の尖光を 背に

しずかな微笑みで

生命たたれた人

が

その日から半世紀

と呼ばれ六、七歳ぐらいには、十二、三歳の読書力があつたと言われていた。商家・平民の出であり、自由民権運動に関心を持ち、中江兆民の書生になつた。兆民は傳次郎の志や能力を高く評価し、自らの若い時に使つていた秋水の号を与えたという。秋水は国民英学会正科を卒業し、その語学力を買われて一八九三年に板垣退助の主宰する「自由新聞」の記者をし、英字新聞の翻訳を受け持った。また部落解放運動に取り組んだ小説「おこそ頭巾」を十五回連載した。島崎藤村の小説「破戒」が出る十二年前だつた。秋水の名を有名にしたのは、その後に移つた「万朝報」で言論、集会、結社の自由をうばつたり、労働運動を弾圧しようとする治安警察法への反対の論陣をはつたことだ。一九〇〇年に三十歳になつた秋水は、「嗚呼自由党死すか、而して其の光榮ある歴史は全く抹殺されぬ。」という名文の『自由党を祭る文』を「万朝報」紙上に発表し、総理伊藤博文、内相山県有朋たちを痛切に批判した。一九〇一年に『廿世紀の怪物帝国主義』を上梓し、兆民から誉め讃えられたという。この書の趣旨は、軍備によつて他国を制圧しようとする二十世紀の悲劇を予言している。秋水は「万朝報」が日露戦争を支持した主戦論に転じたため退社し、堺利彦と「平民新聞」を創刊し、戦争や増税に反対したのだ。しかし秋水の国際的な民衆達の連帯や親愛に満ちた理念は、排外的な愛国心によつて孤立し、平民社を解散せざるを得なくなつた。その後アメリカに渡り労働者の団結を痛

感じ、世の中を変えていく労働運動に目覚めていった。しかし同棲していた菅野スガら四人が関わっていたとされる大逆事件の首謀者としてでっち上げられる。結局全国社会主義無政府主義の被告二十六名が有罪になり、その中で秋水を含めた十二名が死刑を執行された。明治政府の最大の汚点であり、言論、労働運動の自由を奪っていく、あつてはならない事件だった。海外からも多くの批判があった。(『現代に生きる幸徳秋水』編集・執筆／谷口平八郎・宮谷司・森岡邦廣 幸徳秋水を顕彰する会刊行などを参照)

山本衛さんはこの郷土の先達である秋水を誇りに思い、繰り返し秋水のことを詩に書き続けている。その発端になったのが「夏の村」だ。「巨大な 重庄の尖光を 背に／しずかな微笑みで／生命たたれた人／が」山本衛さんの傍らにいて、その命が今も確かに続いているように感じられるのだ。

3

山本衛さんは二十年ぶりの一九八七年に二冊の詩集を刊行した。『午後の夏』と『母と子のうた』の二冊だ。書き溜めていた詩篇を整理して、今まで心に秘めていたものがいつせいに溢れたきたような思いだったろうか。

村

ふるさとに住まぬ

住めぬ子供

だけをつくりつづけて

黙っている

瀬音はここまで窓をはじく〈清流・四万十〉

澄みきつてなくてけっこう

ひととの汚れをほしく

こんな小さな喫茶店へ

寄ってくる奴もいるのだ

——街の店へもげひ

初めて使う小さな名刺のうえの

小麦いろ 四十才 未亡人の顔は

まだ 充分 きれい

出ていく者はいく

ひとりのこらず

この来る春

どんな花が実を結ぶのか

植物ならば

まだ 充分

ここには育つ

忘れものした春が
来そびれて霽はらい雨
になった

カアコの店が

中から呼びとめる

——すどおり？

しかたなしの顔はしてみて固い

木の椅子におさまったが

落ちつかない

——もう村を出るの

このお茶でつなげるひと

しれている

だからといって女を売るのもおまえの

まづいお茶よりましかどうか

口をきると つい

三十年昔の こどもと受持

に戻るが

教員が村につくした

ものはなんであろう

いつの時代も

この詩「村」は第二詩集『午後の夏』の冒頭に置かれた詩だ。山本衛さんは元教師で校長としてのキャリアも長いのだが、これほど教師くさくない教師は珍しい。教え子と教師の垣根をあえて作らない教師なのかも知れない。役所から雇われた公的な立場を優先するのではなく、一人の人間存在としての型にはまらない広さや奥行きを見詰めているのではない。一人の固有存在としての生徒の生き方を見守っている。「忘れものした春が／来そびれて霽はらい雨／になった」という情景描写もさびれた村をうまく暗示している。不景気でしみつたれたような雨が喫茶店から客足を遠ざける。教え子で未亡人のママが顔を出して山本衛さんと呼びとめる。山本衛さんは店をたたんで街へ出て行く教え子の話をじっくり聞いてあげる。教え子も三十年前の先生に思いをぶつけているのだろう。「教員が村につくした／ものはなんであろう／いつの時代も／ふるさとに住まぬ／住めぬ子供／だけをつくりつづけて」という詩行は感動的な言葉だ。他者のせいにするのではなく、「ふるさとに住まぬ／住めぬ子供／だけをつくりつづけて」しまった教師であった自分に、これでもいいはずはないと教師の有り様を内面に深く問い掛けているのだ。子供たちが村に残るような教育とはどうしたらいいのか。その切実であり重たい課題を読む側にも投げ掛けている優れた詩篇だと私は考えている。そして教え子を励まして、「出ていく者はいく／ひと

りのこらず／この来る春／どんな花が実を結ぶのか」と教え子の幸せを願い続けている故郷を体現している真の教師がいるのだ。

第三詩集『母と子のうた』は、母をテーマにした四十七篇の詩から成り立っている。その中から詩「まもる」を紹介してみる。

まもる

くうか

くわれるか

それが人生だ と父はいった

人がひとをくうなんて

そんなにして一人だけ肥えたって

心の方が痩せ細っていくよ と母はいった

くうか

くわれるかの人の世を

いつも辛うじてぼくは生きてきた

からだのどこかはいつかだれかに

くわれてしまっているにちがいない

ないのは、母の教えを備^{まも}ってきたからなのだ。

4

第四詩集『くぎをぬいている』は三十三篇の詩が収録されて、一九九九年に刊行された。タイトルの詩「くぎをぬいている」は山本衛さんの代表作だ。

くぎをぬいている

釘を抜いている

朽ちて倒れた納戸も

釘さえ抜けば

風呂には焚ける

そのままだと菜園畑に

撒いた灰で

足を突き刺したことがあった

今時 廃材で風呂を焚くなど

この近在にも見当たらないが

芯から温い風呂が所望なら

役目の終わった釘は

抜かねばならぬ

釘にもいろいろあって

あなたがくわれて

だれかが幸せになるなら

なんぼでも喰べさせて

いいじゃないの

情けないことだが ぼくは

父よりも母の教えの方を

守ってきてしまったようだ

山本衛さんの「備」は「えい」と詩人の間では読ませているが、正式には「まもる」だという。山本衛さんは父よりも母の教えを守ってきた。目先の利益を優先したつて、すぐにメッキが剥がれてしまうことを痛切に感じているのだ。決して理想を語っているのではない。「あなたがくわれて／だれかが幸せになるんなら／なんぼでも喰べさせて／いいじゃない」と言いきれるのも、ありのままの自然体なのだろう。「喰べさせる」には他者のために働いたり、奉仕するという意味が込められていると思われる。そして教え子、故郷の人びとの幸せを願っているのだ。四万十川の石に付いた藻を食べて育った鮎のように、いつか誰かに食べられてしまう存在感を抱いているのかも知れない。母の教えはその意味で四万十川周辺で生きている命あるものへ、悠久の智慧を暗示している。山本衛さんがなぜか教師になってもいわずゆる教師くさく染まら

頭が

ボールに引つ掛からないのがある

背板に打った短めなら

指先でも抜く

融通の利くものほど

後も使える

辺り一面ぼろぼろに変色させたものは

腐れの中で折れ込んで

にっちもさっちもいなくなる

歪みをなおして

新しくまた使った時代

今はもう新品の釘さえ打たなくなった

釘が利いたころ

ひとにもよく釘を刺した

くぎがくぎのまま釘応えでき

釘の花であった

他人様の領域に鋭く足をぶちこんでまでも

相容れないものを有無を言わせず

結合させた

身の振り方も釘付けの

岫^くのほとり

終の栖 釘貫の門を

訪れる虞姫にもトンとお目にかかれぬ

句義の口義など

愚や具や

汝を如何にせん

* 虞姫 楚の項羽の寵姫、虞美人のこと。前二〇二年四面楚

歌の敗軍の際、名馬騅とひめをひきよせ「騅ゆかずいかに

すべき、虞や虞や汝をいかにせん」と項羽は嘆いた、の故

事より。

私は二〇〇〇年十一月「ONL」五二号でその第四詩集『くぎをぬいている』を書評した。そこで戦前の高知で活躍した岡本弥太の詩行を引き、岡本弥太の詩的精神を引き継ぐものとして次のように記した。引用に出でくる「あらぬ憎しみ」とは冒頭の詩「冬日抄」に出でくる言葉である。

〈岡本弥太のような研ぎ澄まされていく純粋な詩行ではないが、そのかわり自己の内面を絶対化しない、自己を相対化する批評性が効いていて、自己を切開しながら他者にその痛みを共通経験として感じさせるのだ。けれどその痛みは激痛ではない、どこか自己を笑い飛ばすユーモアをさえ感じさせるほろ苦い痛みなのだ。その一人の民衆の愚かさ、悲しさ、喜びといった生の切実さである「あらぬ憎しみ」の全体像を、そんな民衆たちが生きる場所そのものとして記述しようとし

ている。それゆえ他者の生きる姿勢を掬い上げる眼差しが山本衛さんの詩篇には備わっているのではないか。／以上のように考えてくるなら詩集題の「くぎをぬいている」の「くぎ」とは、「あらぬ憎しみ」と同じ意味を指し示していると言えるだろう。さらに言うなら自己と他者たちを貫き共有する「あらぬ憎しみ」を凝視し、それを抱えながら共に生きていこうとする存在者たちの赤裸々な運動こそが「ぬいている」という行為になるのかも知れない。つまり山本衛さんが言葉を発表する原点とは、やむにやまれぬ自他を貫く「あらぬ憎しみ」であり、人は他者に自己の存在を明らかにする「くぎ」のよう鋭い言葉を発する存在であり、それを受け止めることが「生活世界」を成立させる人間存在の前提であると告げているのだろう。その意味で言葉は、真剣だが逆に言えば滑稽にも見える多様な人間の存在の有り様を背負って発せられているのだ。〉(詩論集『詩の降り注ぐ場所』の「自他の生を結合させる詩人」より)

ここで語った評価は今も全く変わっていない。そしてさらに山本衛さんは、その「くぎ」であり「あらぬ憎しみ」を詩語に変えて、四万十川周辺に生きる人びとへ注がれる深い愛へと転換し、結合し続けている。「ONL」は、年に六回を発行し、来年には一〇〇号を迎えようとしている。そのエネルギーの継続の成果が新詩集『讃河』なのだ。

た。私たちに茶を勧め、鮎を土産に持っていかないと云ってくれたが、夕暮れまでに下流まで行きたいのでと立ち話をし、また沈下橋を渡って国道三八一号線に戻った。

讃河IV

ひとりのおんなと

ひとりのおんなと

暮らしたいと思った

川幅に張られたいっぽんのロープに

繋がれている渡船を引いて

おんなの親の許に行く

深く沈む山峽を木枯らしが

呻りながらほとぼしり

小舟は揺れ衣服は飛沫く中に

見える

おんなが

対岸の舟戸の坂を

まるくなつて駆け降りてくる

新詩集『讃河』の第一章「讃河」は一七篇の連作になっていて、第二章「浜田知章氏の帽子」一三篇、第三章「撒水」一三篇、第四章「砂嘴の上で」一二篇の計五五篇から成り立っている。山本衛さんは上流の四万十川の一滴の水にさかのぼり、その川の地理や由来などを解き明かしていく。そしてその川によって生計を立てている故郷の人びとを思いやる。しかし中流域の四万十川の清流をダメにしつつある「ダムと言われないダム」の存在や砂利採取など舌鋒鋭く批判する。水が淀み水が濁れば川の魚たちは少なくなる。例えば四万十川の清流に住む川魚のゴリもその美味のために激減している。下流に暮らす山本衛さんは本来の四万十川を知っているからこそ、その変貌ぶりに「あらぬ憎しみ」や怒りを感じるのだろう。「讃える川」であると同時に「惨めな川」の両面を感じとり、複雑な思いにとらわれている。

山本衛さんが校長だった小学校に行く前に、なぜか三島という川中島に架かる沈下橋を渡って入って行った。昔は沈下橋がなく、歩いて渡るか、渡船で渡ったという。実はこの三島に山本衛さんの奥さんの弟さんの家があるのだという。川中島はコスモスやカンナの花が咲き群れ、田や畑もある豊かな集落だった。ここで暮らす人は助け合って仲良く暮らしているという。弟さんはいなかったが、奥さんが顔を出した。今、村中の味噌を仕込んでいたところだと楽しそうに話してくれ

この詩「ひとりのおんななど」の舞台は三島だったのだ。山本衛さんは一人の女を娶るために女の親に会いに行ったことを記した。この短い詩は、山間の中に忽然と現れる美しい村に暮らす美しい娘に出会った神話のように、私の心に刻まれた。山本衛さんはここから一人の女と家庭を築き、自分の子供や学校の子供たちを育てていった。最も思い出深い場所であり、川と共に暮らす人びとの暮らしを山本衛さんは私に垣間見せてくれたのだ。

三島や土佐昭和を過ぎてしばらく行くと四万十川は大きく左に曲がり、宇和島からの広見川(目黒川)と合流し川を大きくしながら下流に向かい、中村方面を目差す。国道三八一号線は右折し宇和島に向かうので、中村方面は国道四四一号線と名を変えていった。

河口の中村近くなると、小雨も上がり、夕焼けが見えてきた。その夕暮れは見たことのない荘厳な深い紅蓮の夕暮れだった。棚引く雨雲の墨色に深紅の赤が溶け合って墨から紺や藍、赤紫そして赤の諧調が複雑に入り交じり、壮大な夕焼けのタペストリーが四万十川の上空に出現したのだった。山本衛さんもあまり見たことがないと話していた。中村の街に入り、七年ぶりの幸徳秋水の墓参りをした。明治政府からでつち上げの罪で四十一歳で処刑された筋金入りの反戦主義者を偲んだ。七年前には浜田知章さんと山本衛さんと私の三人で墓参りをした。浜田知章さんはいま病の床に伏せておられるが、浜

れて行きたかった場所に案内してくれた。河口の砂嘴だ。その場所をテーマにした詩を引用してみたい。

砂嘴まじの上で

会いたい日はいつもそこに居た

気ままな時をぶら下げて

風をねだり 水くすに擦すられ

身勝手だけは言わない

かなしいからきみも

うれしいからきみも とか

うかれすぎるとたしなめられ
しむむ思いを下げて行くとなだめられ
こわばりの肩を抱かれたりする

四季おりおり

水禽や花々の衣装を身にまといながら

黒潮のへりまでも海を貫いて繋る水の樹木の

巨大な根株

大河の中洲へ

田さんは秋水を尊敬し詩にも書き残していて、終生変わらぬ想いを抱いているのだろう。私はそんな浜田知章さんの想いを想起しながら共に頭を垂れたのだ。新詩集の第二章「浜田知章氏の帽子」はその時に被っていた帽子について山本衛さんが書かれた詩だ。浜田知章さんが秋水の縁で中村に親近感を持ち、私を誘わなければ、今この中村に私がいることはなかったことを思うと不思議な気がした。そして浜田知章さんに感謝をし、回復を心から祈念した。

詩「裁判所界限」で山本衛さんは秋水に触れて「四六時中判事検事に見張られているこの場所で／幸徳秋水への市民の心に／日差しが強く照りはじめているが／大逆の濡れ衣はまだ乾いていない」と書き記している。また第二章は少年だった山本衛さんが戦時中に大人たちから聞いた話を甦らせている詩篇が数多くある。そこには戦争に翻弄された民衆の悲しみが貴重な証言となって刻まれている。

第三章は父や母、親族などの身近な人間との関わりで、山本衛さんが受けついだことを感謝を込めて詩に残している。家族を通して四万十川周辺で生きた人びとを浮き彫りにしている。第四章「砂嘴の上で」の詩篇は四万十川でこれからも生きていく人びとを希望のように描いている。例えば孫の話なども山本衛さんの分け隔てのない自由な眼差しで活写されている。

夕暮れが終わろうとするころに、山本衛さんは私を最も連

二〇〇〇年初めての日に会いに来る

いざりよる冷たい朝靄の風が

はやくも驚いろに枯れ葦の穂をわたっている

ぼくらの地軸はいつも不本意に傾き

誤作動ばかりをみせるが

砂洲もどうやら人を真似ているようだ

木枯らしに逆らい

奔流を逸れる水脈の下に

土砂だらけの掌を一握りずつ積み上げて

だまつていのちを養う砂嘴まじになって

四万十川の河口堤防の最先端まで車で来て、その下の岩場を降りて砂嘴が最も近く見える場所までやってきた。太平洋がひらけ、荒波が遠くの右手の磯に打ち寄せる。砂嘴のある左手は、波はなく穏やかな下田港だ。雨があがった。すると山本衛さんが叫び声を上げた。「鈴木さん、虹だ！」太平洋の水平線から下田港に架かった巨大な半円の美しい虹だった。私たちはしばらくその虹を見続けた。

不入山から一九六キロ、三一九もの支流が集まる大河の終着地点がこの場所だったのだ。山本衛さんは迷いがあつたり、人に言えない悩みがあつたときにこの場所を訪れるのだろう。確かにここはあらゆる悩みや問いへの答えを促す不思議な場

所であるだろう。この場所は米などの穀類・炭・材木など旧幡多郡一帯の産物の集積地で、戦前・戦後しばらくまでは高知でも最も栄えたところだったという。またどこよりも早く文化・流行がこの港から入ってきたという。その栄華盛衰を経て、今も何か不思議な力を湛えた虹の立ち昇る場所だった。

山本衛さんの最後の一行「だまっていのちを養う砂嘴さしになつて」は、いのちを養うものへの感謝と永遠の相のもとで自らの答えを探せというメッセージを私たちに伝えている。

この詩集を四万十川を愛する方々、全国の山河・海を愛しながらその場所で生きておられる多くの方々にぜひ読んで欲しいと願っている。